

5-2022

Rethinking the Benefits of Tadoku: The Effectiveness of "Tiny Tadoku Habits" on Learners' Sense of Well-Being | 多読によるプラス要素の再考察: 通常授業内「ちょこっと多読」がもたらす学習者のウェルビーイングへの有効性

Atsuko Takahashi
Smith College, atakahas@smith.edu

Chikako Hirayama Cooke
University of Texas at Austin

Follow this and additional works at: https://scholarworks.smith.edu/eas_facpubs



Part of the Japanese Studies Commons

Recommended Citation

Takahashi, Atsuko and Cooke, Chikako Hirayama, "Rethinking the Benefits of Tadoku: The Effectiveness of "Tiny Tadoku Habits" on Learners' Sense of Well-Being | 多読によるプラス要素の再考察: 通常授業内「ちょこっと多読」がもたらす学習者のウェルビーイングへの有効性" (2022). East Asian Languages & Cultures: Faculty Publications, Smith College, Northampton, MA.
https://scholarworks.smith.edu/eas_facpubs/18

This Conference Proceeding has been accepted for inclusion in East Asian Languages & Cultures: Faculty Publications by an authorized administrator of Smith ScholarWorks. For more information, please contact scholarworks@smith.edu

多読によるプラス要素の再考察：
通常授業内「ちょこっと多読」がもたらす
学習者のウェルビーイングへの有効性

RETHINKING THE BENEFITS OF TADOKU:
THE EFFECTIVENESS OF “TINY TADOKU HABITS” ON LEARNERS’ SENSE
OF WELL-BEING

高橋 温子
Atsuko Takahashi

クック平山 史子
Chikako Hirayama Cooke

スミス大学
Smith College

テキサス大学 オースティン校
University of Texas at Austin

1. はじめに

ここ数年、NPO 多言語多読 (栗野他 2012) によって普及された多読を日本語教育に取り入れる大学が増えている。多読が日本語学習に与える効果として、語彙力が高まる (三上・原田 2011)、楽しんで読める経験が有能感や達成感を強め、もっと読もうという内発的動機付けを促す (二宮 2013)、メタ認知能力を活性化させ、学習の自己調整を測る能力がつく (二宮 2014)、日本語で何か読めることで学習意欲に好影響を与え、教科書外の読み物に触れることで自信と経験が養える (高橋 2018) など、日本語学習にプラスになる要素が多いことが報告されている。

本稿では、通常初級日本語授業の一環として、5～10分程度で多読をする時間を設け、学期を通してそれを継続した北米大学2校、スミス大学とテキサス大学オースティン校の実践例を紹介する。筆者らは、この取り組みを「ちょこっと多読」と名付け、授業の冒頭に授業内容への妨げにならず無理のない程度の短い多読時間を設けることにした。また、本稿の後半では、双方の大学の学期末アンケート調査の結果をまとめ、ちょこっと多読の継続が、学習者の日本語学習面だけでなく精神面、いわば学習者のウェルビーイング (well-being) に、どのような効果や成果を与えたのか考察する。

2020年に全世界を突然襲ったパンデミックは、それまでの教育界の観念を覆す新しい学習法や教育理念の模索と実践を促す機会をもたらし、その中で、学習者の精神面への配慮や学習者ウェルビーイングについての考えも広がった。これらを含め、本稿では、授業内の継続的な短時間の多読がもたらす学習者ウェルビーイングへの貢献ともいえる多読のプラス要素を探る。

2. 今までに報告されている多読の魅力と効果

多読の魅力として挙げられるのは、1) 楽しみながら学べる、2) レベルに関係なく完全な個人ペースで進められる、3) 読んだ後のクイズやテストの読解問題もないため、プレッシャーもほとんどない、4) 語彙力、読解力、表現力が自然につく、5) 多読のアウトプットとして、ブックトーク、発表会、ビブリオバトル、本作成プロジェクトなど、幅広く様々な形¹での可能性がある（栗野他 2012）。筆者らの大学の多読体験者のこれまでのアンケート²からも上記の 1)~4) を立証する回答が見られ、「知らないうちに語彙が増えていた」「文法の使い方がわかった」「習った文法が使われているのは楽しい」「毎日読んでいるから読む力が向上した」「読む速度が早くなった」「活用や単語を丸暗記するより話の中で使われているのを読む方がずっと勉強になる」「助詞や活用の使い方がわかってきた」「テストがないので、楽しめる」「何を読んでもいいので嬉しい」などのコメントから多読活動の有効性が見られる。他にも「ひらがなやカタカナが早く読めるようになった」「授業で勉強した漢字が読めて自信がついた」「わからない単語や文法や漢字があっても、話が読めるようになった」などの学習効果も報告されている。

3. 通常授業の一環としての多読

これまでの多読の実践報告として、多読クラス(小島 2016、瀬戸 2021) や多読クラブ(熊谷 2014、松田 2018)、日本語多読を通常日本語授業に取り入れた報告(高橋 2018、Cooke 2020、中 2020)があり、様々な形態で報告されている。このように、多読活動は普及したものの、日本語教育としてデフォルト的な会話練習、読解練習、作文などのように多読はまだ確立されていないと思われる。これは、多読本購入の資金確保、教室への本の持ち運びの負担、クイズや文法練習などの授業時間が削られるという点など、多読を日本語授業のカリキュラムの一部としてデフォルト化しにくい懸念や諸事情があるからであろう。

しかしながら、筆者らが、多読を通常授業の一環として取り入れる実践に至った背景には、大きく3つの事情がある。一つ目は、大学によって、理系優位の方針や学部の金銭状況、継続的な日本語教師不足、学部内新コースの設立条件、さらに教師のオーバーロードの状況もあり、多読クラスやクラブの開講は困難なことが多いことである。

二つ目は、なんとか多読クラスやクラブを開講できたとしても、学生個々の様々な理由や状況で、履修または参加できない学生が多いであろうという懸念である。

三つ目は、パンデミックを機に誰でもアクセスできる無料のオンライン多読本が多く作成され、カリキュラムのオンライン化も進んだことで、パンデミック以前と比べると、通常授業内多読がよりし易くなった要素が増えたことである。

¹ 日本語教育いどばた「のぞいてみよう多読の世界」 <https://www.idobata.online/> 参照。

² スミス大学とテキサス大学オースティン校による学期末匿名アンケート

大学や学部の形態や方針、教師数については、日本語教師一人が容易に解決できることではない。おそらく、他の大学でもクラスやクラブを開きたくても、なかなか実現に至らない、または開講されても継続が難しいなど、それぞれの事情があると思われる。二つ目に述べた懸念については、スミス大学とテキサス大学の例をあげて補足する。

スミス大学は、2016年春学期と2017年秋学期に近郊の3大学合同の多読クラスの開設に協働したが、実際に多読クラスを取った学生は全体の日本語履修者の5~7%ほどで、2学期間続ける学生はいなかった。当時の日本語履修者の声を聞くと、その多くは、時間的な余裕、他の学習の優先、アルバイトと重なるなどの理由で多読クラスは取れないということだった。これは多読クラブがあったとしても同じであろう。

テキサス大学は、卒業単位の関係などもあり、多読クラス開講の実現はできない状況である。日本語プログラムではボランティアの講師らが始めた多読クラブと図書館読書クラブがあり、2020年3月パンデミックに入るまで本を読む場所を設けた。しかし、結果として、多読を体験するまたは通い続ける学生の数は大変少なかった。日本語履修者の延べ人数は毎学期400人前後³いたものの、クラブへの参加平均率は2%以下であった。スミス大学と同様、興味はあるもののアルバイトや他のクラス、クラブなどで、参加する時間や余裕がないという声も多くあった。州立大学ということもあり学生の経済的な背景が様々であることが関係すると同時に、学業以外のボランティア活動、リーダーシップ活動など、社会貢献に時間を割く学生も大変多く、週に1時間程度の読書時間さえも取りにくいという現状であった。

つまり、どちらの大学でも多読クラブやクラスがあったとしても、必ずしも学習者に公平に多読の機会を提供できているとは限らないという現状があると思われる。

ここで、筆者らは、今現在の多読クラブやクラスのあり方に賛同した上で、新たにより多くの学習者に多読体験をしやすくする教授法的な可能性を述べたい。これまで、NPO 他言語多読を始めとした多読支援者の尽力のおかげで、ここ数年の日本語多読の発展と広がりには目覚ましい。多読クラスやクラブは、読書が好き、多読に興味がある、日本語クラス以外で日本語学習がしたい学生らが参加でき、好きな本やメディアを使いながら、学習者主体で学習活動ができる場と機会を提供している。日本語レベルに囚われず、または日本語クラスを履修していなくても参加できるインクルーシブな形態である。

しかしながら、学習者の誰もが多読クラスやクラブに参加できるかどうかという観点から見ると、先に述べたように様々な諸事情を抱えている学生は参加を見送っており、クラス、クラブを設立できない大学も多い。そのような学生は多読を経験せずに日本語学習を続けていくというのが現状であろう。日本語学習者の多くが多読を経験する機会を提供するためには、よりインクルーシブな多読の学習環境を創り出す必要があるのではないだろうか。

³ 2018年度 829人 2019年度 831人 2020年度 812人

このような課題をふまえ、通常授業の一環としての多読の実践が、より多くの学習者にとって公平であり、多読をより経験できる場になるのではないかと筆者らは考える。インクルーシブ教育の理念のひとつは教師らが積極的に誰もが参加できる包括的な授業環境を整えていくことである (Addy, et al. 2021)。通常授業の中で、多読ができる環境を整え、より多くの学習者が多読を経験し、その恩恵を個々の学習に生かせたら、というのが筆者らの強い願いである。また、多読学習者が増えれば増えるほど、多読支援やオンライン教材、多読関連の出版なども、今後、さらに活性化するであろう。

ここにおいて、パンデミックは多読活動に一つの大きな節目をもたらした。それは、オンラインの多読リソースが劇的に増え、コンピュータやタブレット、スマートフォンなどで、より手軽に本が読めるようになったことである。教育関連のサイトや公共図書館など、期間限定が多かったもののオンラインで様々な本の閲覧ができるようになり、各大学でも電子書籍が増えた。このような流れの中、大学図書館で日本語多読の電子本を購入する動きもあったのではないだろうか。また、NPO 多言語多読を始めとした様々な日本語多読サイトや多読支援者らによって、パンデミックで図書館にも教室にも足を運べない学習者のために、オンライン多読リソースをまとめた情報提供や多読本作成がより多く行われた。これらの無料で質のよいオンラインの読み物も増えたことで、教材への信頼度も厚くなった。こういったパンデミックによる無料オンライン教材への影響と共に日本語多読の環境も大きく変化した。この変化により、多読本購入の資金面と教室への本の持ち運びの負担への心配も減少したと思われる。

また、パンデミックは、日本語カリキュラムのオンライン化を促進した。遠隔授業ではクイズは授業時間外で受けられるように、LMS のクイズ機能を活用した大学が多いのではないだろうか。筆者らの日本語クラスでは、対面授業に戻った後も、LMS を引き続き活用することで、クイズは授業時間外で受ける形式をとった。このことにより、スミス大学では、週に1~2回、各10分程度、授業時間の余裕ができた。そこで、今までクイズに使っていた授業時間を多読に当ててみてはどうか、この、ちょっとした発想の転換が、授業内で多読を継続的に取り入れる上での大きな後押しになった。

テキサス大学ではパンデミック以前から、上級クラスの短時間多読、初級と中級の隙間時間多読などをゆるく始めていたが、パンデミックを機に、上記のスミス大学同様、LMS のクイズ機能を活用し、冒頭の時間を全クラス「日本語多読時間」にあてた。

4. 「ちょこっと多読」とは

スミス大学とテキサス大学では、2021年の秋学期に通常初級日本語授業の一環として、5~10分程度で多読をする時間を設け、学期を通してそれを継続した。筆者らは、このように、授業の冒頭に授業内容への妨げにならず無理のない程度の短い多読時間を設ける取り組みを「ちょこっと多読」と呼ぶことにした。ちょこっと多読の狙いは、短時間でも多読を習慣化する環境を通常授業内に設けることにより、学習者の誰もが多読を体験できるようにすることである。

「ちょこっと多読」の流れとして、教師は授業の前に多読の本、またはウェブサイトのリンクを準備しておく。教室の大きいテーブルや机の上に多読本、漫画、フリーサイトから印刷した冊子などを並べておく。また、LMSには、無料の多読本サイトや大学図書館の多読電子本のリンクを貼っておく。学生は教室に入るとすぐに、用意された本または、オンラインサイト、電子書籍本、自分の本など、教科書やワークブック以外のものの中から、好きなものを選び静かに読み始める。教師はその間、本選びを手伝ったり、自ら本を読んだりしながら、クラス全体で静かに本を読むという環境を作る。そうすることにより、読む雰囲気を作り出す効果を狙う。

4-1. 「ちょこっと多読」を通して目指すもの

筆者らが初級クラスから授業冒頭に短時間多読を実践することにした目的と理由は、以下の通りである。

4-1-1. 初級クラスから多読を取り入れる：

より多くの学生が多読を通して日本語に触れることによって日本語を読むこと自体に早くから慣れてもらうことが狙いである。日本語学習の早い段階から、学習者は上記にあげた多読の魅力や効果を実感できる。

- 1) 初級の段階からオンラインや学内の多読リソースにふれることで、個々の学習に生かせる。
- 2) ひらがなとカタカナの導入後、すぐ読む習慣をつける。
- 3) 少々わからない単語があっても飛ばしながら読んでもいいという観念を初期段階から入れ、内容を追うことに慣れる。

4-1-2. 授業の冒頭に入れる：

- 1) 授業の進み具合に影響されないため、結果的に「今日は多読をする時間がなかった」ということにはならず、「多読時間」が確保しやすい。
- 2) 授業の最後だと、次の授業に行く準備や帰り支度を始める学生も出るため、多読に集中できない可能性もある。
- 3) 早めに教室に入る学生には、読む時間が増え読む量が増えることになる。
- 4) 教室に入ったらすぐ読む習慣をつけさせる。

4-1-3. 短時間でする：

- 1) 学生の負担にならない。
- 2) 集中できる。
- 3) 読書そのものが苦手な学生にもさしたる苦痛にならない。

4-2. 教師側から考えた「ちょこっと多読」の利点

- 1) 大学や学部の方針や状況、教師不足などの影響がほとんどない。

- 2) より多くの学習者が多読を体験でき、多読リソースを使うことができる。
(equity, equality 平等・公平)
- 3) 多読を習慣化することで、次のレベルで、教師が変わっても学生は自律的に続けていける。
- 4) 日本語学習の早い時期から始める方が、後の学習に効果的である。
- 5) 多読的な読み方ができる学習者が増えることで、中級以降での読み物中心のクラス活動がしやすくなる。

5. 「ちょこっと多読」の初級実践例

5-1. スミス大学とテキサス大学の初級実践の一覧表

スミス大学とテキサス大学の初級日本語クラスでのちょこっと多読の実践をまとめた図を以下に示す。

	スミス大学	テキサス大学
実践クラス	初級 1 学期目	初級 1 学期目
人数	全 3 セクション、42 名	2 セクション 40 人
頻度	週 2 回 (火木) 5~7 分	週 5 回 8 分~10 分
教科書	げんき 1~8 課	ようこそ Getting Started ~3 課
使用した多読教材	<ul style="list-style-type: none"> ● よむよむ多読ライブラリー レベル 0~1、30 冊 ● NPO 多言語多読レベル 0 と 関西国際交流基金 レベル A-1 の無料多読本の一部、18 冊 ● スミス大学の日本語 1 年生 (2017 年、2018 年、2019 年秋学期) が作成したレベル 0 の多読本、58 冊 計およそ 100 冊 	<ul style="list-style-type: none"> ● よむよむ多読ライブラリーレベル 0~1 ● 日本語多読ブックス レベル 0~1 ● NPO 多読サイトの レベル 0~1 を印刷した本 学生持参のタブレットやラップトップからオンライン教材として ● NPO 多読サイト ● 図書館電子ブックス よむよむ多読ライブラリー 日本語多読ブックス ● 学生が持参する本
読書記録	Google Form で記録	記録オプション
全体の成績で多読が占める率	5% (読書記録の提出による)	2% (多読とは別の Daily Writing も含まれる)

5-2. スミス大学での実践

スミス大学では、2007年から通常授業カリキュラムに多読をゆるく取り入れ、10年以上かけて日本語プログラム全体に浸透させてきた。2021年秋学期の日本語1年生クラス（全3セクション、42名履修）では、学期が始まった9月上旬から読み聞かせを始め、教科書「げんき」の第4課を終えた10月下旬から、ちょこっと多読を始めた。毎週2回（火木）、授業の冒頭の5～7分間をちょこっと多読の時間に当てて、12月の中旬の期末まで続けた。教室に準備した多読本は、NPO多言語多読の監修によるレベル0に当たるものが中心で、無料多読本をカラー印刷したものも足した。また、オンラインで読みたい学生のために、LMSに無料で読める多読本のリンクや図書館のデジタル多読本のリンクを貼った。ちょこっと多読の時間で読みきれなかった本は、授業の後に借りてもいいことにした。読んだ後、クラス共有のGoogle Formの読書記録に記入できるよう、当日のパワポとLMSに読書記録サイトへのリンクとQRコードを貼った。クラス共有のGoogle Form読書記録はGoogle Spreadsheetにデータ化し、クラス全体に閲覧のみ可能にした。学生は、そこから自分の記録だけを日本語ポートフォリオにコピー&ペーストし、個人の読書記録を継続していった。

5-3. テキサス大学

テキサス大学の筆者の担当クラスでは、パンデミック前から中級・上級はすでに授業内短時間多読を実践していたが、2021年秋学期より初級からも始めた。本稿では、この初級1学期目に重点をおく。「ようこそ」の「Getting Started」のチャプターを終えた6週目後半、9月下旬から短時間多読を導入した。仕様は、スミスとほとんど同様である。教師がNPO多言語多読の監修による大修館とアルク出版のレベル0の多読本と白黒印刷したオンラインのNPO多言語多読レベル0の多読本などを持参し、LMSには大学の図書館日本語多読用電子書籍リンクとNPO多言語多読のオンラインフリーサイトを始めとしたいいくつかのサイトを載せ好みの本を選びやすく読みやすくする環境作りを努めた。学生が教室に入ると同時に教師が用意した多読本を選んで読み始めるか、持参した日本語の本やオンライン多読教材を読み始める。授業冒頭の8～10分は、静かに読書をする時間にあてる。途中から、大修館とアルクの多読本のレベル1も加えた。本の貸し出しはしていないが、学生は、授業時間外に大学の図書館電子書籍で多読本のほとんどを読むことができる。授業内多読の記録をつける必要はない。（初級2学期目から多読の宿題があり、それは記録をつけさせているが、初級1学期目は宿題にはまだしていないため、その場で読むだけである。）

6. アンケート調査について

アンケート対象はスミス大学とテキサス大学の2021年秋学期日本語1年生1学期目で、学期末に匿名でオンラインアンケートに回答してもらった。スミス大学の回答者数は42名中33名、テキサス大学の回答者数は、40名中35名であった。調査対象の日本語初級1学期目の学習者は、それぞれの大学で多読は読み聞かせから始め、学期の中間から実際に本を手にとって読み始めた。双方の

クラスでの相違点は、使用教科書と週に行うちょこっと多読の頻度で、他の条件はほぼ同じであった。

双方の大学で、それぞれのアンケートを作成したが、その中に共通の質問を取り入れた。共通のアンケート質問内容は、” How is your experience of *Tadoku* time at the beginning of class? Please write anything you noticed, recognized, or realized.” というもので、授業の最初にするちょこっと多読の経験はどうだったか、何か気づいたことがあったかなどを簡単に英語で記述してもらった。これは、ちょこっと多読の研究の第一歩として、まずは初級1学期目の学習者が、授業冒頭での継続的な短時間多読を通してどのような経験をしたかを把握するためである。また、共通の質問の他に、多読と日本語学習に関する点についても各大学に相応の質問形式で回答してもらった。こちらの質問項目と結果⁴については、本稿の最後に図で示すとし、そちらをご覧いただきたい。

7. アンケートの分析結果

ここでは、双方の学生に共通の質問項目である、授業の冒頭にするちょこっと多読の経験についての回答記述に絞って分析しまとめる。共通アンケート質問の回答記述は、オープンコーディング法（佐藤 2019）を用いて質的に分析した。まず、学生の英語での回答をフレーズや文ごとに切片化し、注目する部分を日本語に訳してコード化した。さらに、類似したコードを内容に基づいてもう一段階要約しラベル化して、帰納的に新たな概念を生成する形でまとめた。

回答記述をオープンコーディング分析した結果、スミス大学から 47、テキサス大学から 33、合計 80 のコードが抽出された。ラベル化の段階において、これらのコードをカラーコーディング（緑はスミス大学、黄はテキサス大学）でマッピングすると（図 1 参照）、緑と黄とほぼ同じ件数でコードのまとまりを形成している部分が多くあり、双方のコードに類似性がみられることがわかった。

双方の類似するコードからは、ちょこっと多読は、教室に入ってすぐに日本語で会話したりせずに、学生自身のペースで頭の中での日本語のウォームアップができる方法であり、無理のない授業への準備の機会として認識されていることが示された。他にも、その日の気分の向上、目覚まし、授業と授業の間で気分をリセットし落ち着きを取り戻し、静かな環境の中でリラックス感や集中力が増すという効果もあることが示唆された。ある学生らは、他の宿題やしなくてはいけない物事(responsibilities)を数分忘れられて、読むことに集中できる時間、他のことへの心配事や邪魔のない時間として、短時間でも1日の中の特別な時間であることを記述した。また、決まったスケジュールで静かにクラスメートと読む機会が好きで、授業に来る楽しみの一つになったというコードも多かった。日本語の学習面では、学期を通してじわじわと日本語で読めるようになっていくことの実感を得られたことが双方の学生に共通していた。

一方で、各大学に偏りがあるコードのまとまりもあった。スミスの学生は、「ちょこっと多読は静かに集中してより多くの本が読める時間」と認識し、クラス内での学習的な価値がある時間ということを示唆するコードが多かったが、

⁴ 学期末に多読に関しての匿名アンケートを実施。資料として本稿最後に提示。

一方で、「人がいないほうが逆に集中でき、授業外で読む方がいい」という内容のコードが2件あった。テキサスの学生は、「教室に入る際にどう社会的に振る舞えばいいかという不安がない、クイズで授業が始まるよりいい」など、ちょこっと多読で授業が始まることで、社交へのストレス (social anxiety) やクラスへの不安が軽減されることを示唆するコードが見られた。

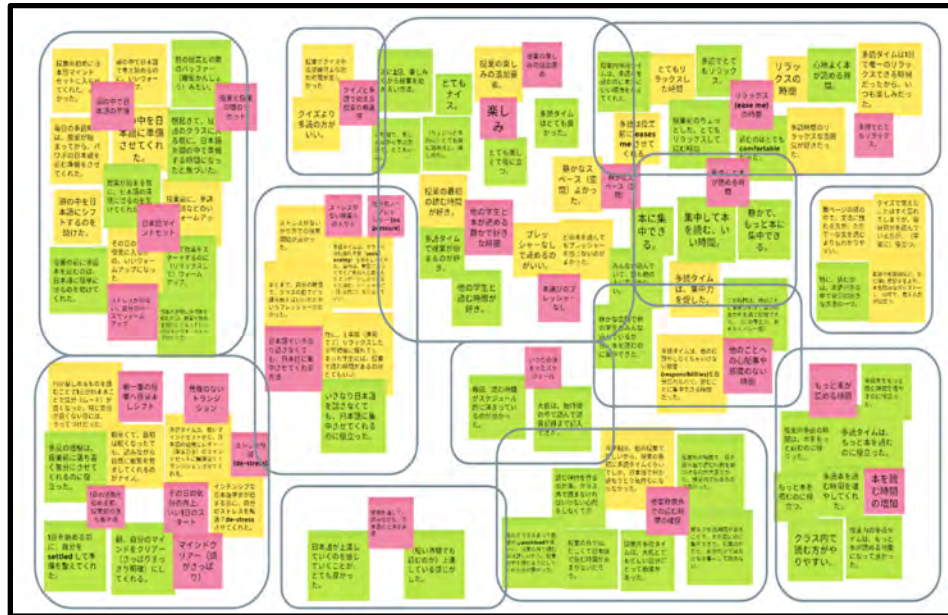


図1 カラーコーディング

8. 考察

分析結果から、授業の冒頭でのちょこっと多読は、学生自身のペースで、社交不安などのストレスがほぼかからない状態で、授業に入る前の日本語ウォームアップを促していることが示された。おそらく、通常日本語授業でのウォームアップといえば、既習文法や語彙表現を使って、何か簡単な会話をする、または、絵や写真を見て話し合うなど、話すことが中心であろう。実は、筆者らは長年、どうやったら短時間で簡潔な授業前ウォームアップができるか工夫を凝らしてきたのだが、頭の中を短時間で叙々に日本語モードにウォームアップする上で、ちょこっと多読が役立ったというのは興味深い。また、朝一番の日本語クラスの場合は、目覚まし効果やその日の気分の向上作用、また、他の授業から来る際には、落ち着きを戻し、頭のリセット効果もあり、授業の冒頭の静かな5~10分間での多読は、頭を日本語モードにする過程で、身体的な部分にも意外な役割を果たしていることがうかがえる。学生は、実際の日本語授業に入る際に、ちょこっと多読を通して、頭の中の言語モードと気持ちの切り替えをスムーズにすることができたのであろう。

そして、ちょこっと多読は学生の学習面への効果と精神面のストレス緩和の役目も果たしていることが示された。学習面では、習慣的に本を読むことで日本語で読む時間と量が増加した。これは、学期を通して継続することで、日本語に触れる時間が蓄積し、日本語で読むことに叙々に慣れていくことに繋がっ

た。結果的に、通常授業で学んでいた語彙、文法、漢字などとの相乗効果もあり、日本語の上達をじわじわと実感したという自己肯定感にも繋がったのではないかと推測する。

また、精神面では、教室に入る際の社会不安やクラスメートへの振る舞いの心配がないことや、気分が向上していい1日の始まりのきっかけになったり、静かに集中して読むことでリラックス効果があったりと、日々のキャンパス生活の中で、自分の時間の確保、学生の気分向上やストレス軽減に役立っていることが示唆された。

さらに、他のクラスの勉強やクラブ活動、アルバイトや仕事などのため、授業外で日本語で本を読む時間の確保が難しい学生から、ちょこっと多読の時間は「本を読む」ことに集中できる唯一の時間だったという声も多かった。スミスの学生は、本を読むことがコース課題の一つだったため、なるべく授業内でできる課題はこなし、授業の外でする様々な勉強を効率化したいということがうかがわれた。その意味において、ちょこっと多読は集中して本が読める価値ある時間であり、同時に学業のストレスを少し緩和したのではないかとと思われる。

何より、日本語クラスへ来る楽しみが増えたというのは、教師として嬉しいことである。本選びのプレッシャーがなく、周りを気にせずに、静かに集中して本が読める時間であったようである。そして、他の学生も周りを気にせずに静かに好きな本を読んでいる環境は、心地よいものであったようだ。

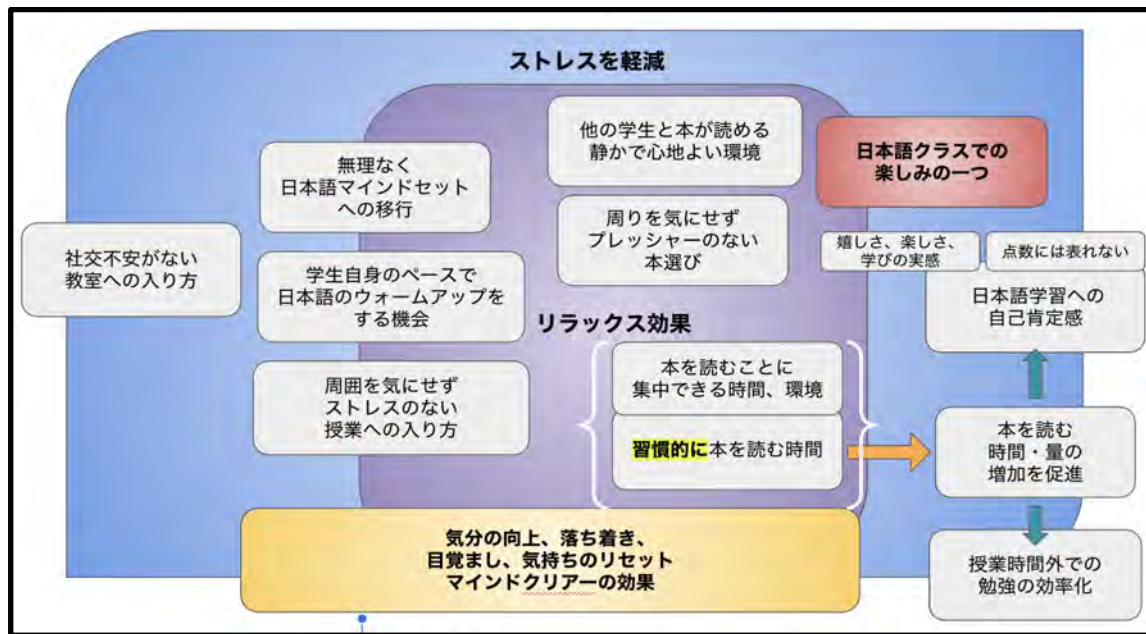


図2 考察

一方で、通常授業の履修者全員が多読を体験し多読のリソースを使うことができる良い機会ではあっても、他の人がいるだけで逆に集中できないタイプの学生や、読書自体があまり好きではない学生がいることも確かである。しかし

ながら、ちょこっと多読のいい点は、あくまで5～10分間の短時間なので、神経過敏なタイプの学生でもそこまで苦にはならないようであった。また、読書が好きではないため、「日本語で何か読もうとさえ思わなかったが、ちょこっと多読を通して、日本語で読むのは面白いと思うようになった」というコメントもあった。このように食わず嫌いタイプの学生にとっても、ちょこっと多読は、無理やり感なく本を読んでみる機会を与えていたようである。

また、双方の大学で違う教科書を使用しているにもかかわらず、ちょこっと多読の経験を通して、類似した学習面やウェルビーイング面での効果を実感していることが示された。スミス大学は週に2回、テキサス大学は週に5回の実践であったが、どちらの学生も同じような学習とウェルビーイング効果に関するコメントをしたため、最低でも週2回のちょこっと多読の継続が望ましいのではないかと推測する。

9. まとめ

授業冒頭でのちょこっと多読の継続は、通常授業の学習内容との相乗効果とともに、能力主義とは違う自己評価を通して、学習者の自己肯定感を促し、学生生活からのストレスリリースとしての効果、授業に臨む前のリラックス感、集中力の向上、クラスへの楽しみが膨らみ、読書を介して新しい世界と繋がる喜びの増強など、学習者の総合的な心身良好状態（well-being）に貢献している様子が示唆された。また、教授法的な視点からも、ちょこっと多読は、学生の気持ちの切り替えと頭の中の日本語ウォームアップを無理なく促し、授業に集中できる静かな空間を整え、学生にとって、より良い環境で授業内容に入ることができるバッファー（時間的なゆとりと気持ちのクッション）効果があることも興味深い。実は、このバッファー効果は、教師側（筆者ら）も実感したことであった。ちょこっと多読で一息つき、静かに授業を始めることが心地よく、また、教室に行く楽しみを増やしてくれたのは確かである。

本稿では、これらを、今までに報告された多読の効果にプラス要素として報告すると共に、パンデミックを機にリソースやカリキュラムを見直し、オンライン化の恩恵と発想の転換を生かしながら、教師が積極的に授業環境を整えることで、学習者の学習面だけでなく精神面にも貢献できる可能性も示唆していると考えられる。初級レベルからの授業内ちょこっと多読の継続を通して、読解力を培いながら、授業前のストレスを軽減し無理なく日本語マインドセットへの移行を促す教授法の一つ、また、Less doing, more being ともいえる学習者ウェルビーイング支援の一つの方法として、ちょこっと多読の有効性を提唱したい。

10. 終わりに

ここ数年、多読は様々な形態で広まっている⁵中、筆者らは、ちょこっと多読もその中の一つとして考えている。この先、日本語クラスを取り続ける学生と

⁵ 「のぞいてみよう！多読の世界」『日本語教育いどばた』参照
<https://www.idobata.online/?tag=tadokunosekai>

必須科目の単位終了や時間の関係でもう日本語は続けない学生、其々の日本語学習の「その後」が出てくるが、どういう状況であれ、本を読む習慣を学期中につけていけば、その何割かは多読を続けていく可能性があるだろう。願わくは、大学授業、成績とは関係なくなんらかの形で将来も日本語に接し続けてほしい。また、日本語に限らず、多読活動を通して得た知識は、他の教科や分野の学習、個々の興味の探求にも繋がり得る。そして、学習面のみならず精神面からも読書という習慣を続けて、個々のウェルビーイングに生かしてくれればと思う。

11. ちょこっとの偶然

パンデミックの最中、NPO 多言語多読は、ズームでワークショップや勉強会を開き、世界中の多読支援者を繋げ、コロナ禍でも多読支援を継続するための工夫やアドバイスを共有する機会を積極的に作った。筆者らは、偶然、そこで出会い、お互いの懸念や問題、アイデアを分かち合うことができた。スミス大学の筆者は、パンデミック前は、初級カリキュラムでできる限りの通常授業内多読を実践していたが、もっと継続的にクラス内で多読ができないかと模索していた。奇しくもパンデミックは発想の転換を促し、パンデミック前にはできなかったであろう「ちょこっと多読」の実践を試みる機会を与えてくれた。テキサス大学の筆者は、パンデミックを機に改めて授業内短時間読書「ちょこっと多読」の意義を確信し、初級からも始めることにした。この出会いも新しい試みも、パンデミックがあつてのことであり、学習面の有効性のみならず、精神面、学習者のウェルビーイングにも今まで以上に焦点を当てる必要性を感じた。

参考文献

栗野真紀子・川本かず子・松田緑編著 (2012). 『日本語教師のための多読授業入門』アスク出版

「のぞいてみよう！多読の世界」『日本語教育いどばた』
<https://www.idobata.online/?tag=tadokunosekai> (accessed 2022-04-15)

小島裕子 (2016). 多読×ビブリオバトル. イマ×ココ：言語教育実践 (4), 26-31, 2016
ココ出版

熊谷由香 (2014). The way of Extensive Reading 「多読という読み方」. AATJ
Newsletter September 2014

高橋温子 (2018). 超初級学習者から始める読みの教育：日本語1年生1学期目コースでの多読の取り組み実践報告. JLTANE 2018 発表要項

中智恵子 (2020). 「多読活動から話す活動への展開（初級後半のクラスでの実践

報告)」 『ことばの教育の力：教育におけることば（母語・第2言語・外国語）の役割とは？』 プリンストン日本語教育フォーラム proceedings. pp.199-211

二宮 理佳 (2013). 多読授業が初級学習者の内発的動機づけに及ぼす影響, 一橋大学国際教育センター紀要第4号

二宮 理佳 (2014). 多読と内発的動機づけ、及びメタ認知活動, 一橋大学国際教育センター紀要第5号

瀬瀬憲子(2021). 「個別活動における評価:多読授業での教師の内省から」、『コロナ後の日本語教育—変革と成長の機会へ』カナダ日本語教育振興会、proceedings. pp13-21.

三上京子・原田照子.(2011). 多読による付随語彙学習の可能性を探る—日本語版グレイディッド・リーダーを用いた多読の実践と語彙テストの結果から—、国際交流基金、日本教育紀要第7号

松田いずみ(2018). 「ワシントン大学における多読クラブの試み」、『第2回南カリフォルニア大学多読ワークショップ』

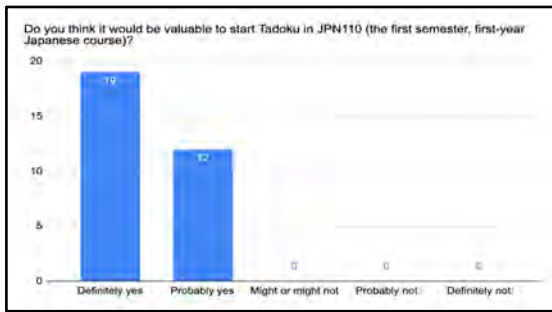
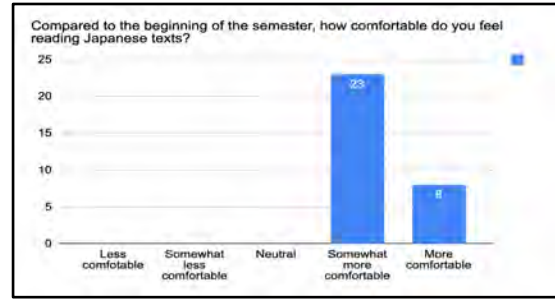
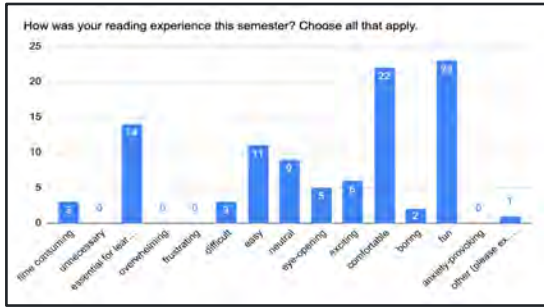
佐藤郁哉 (2019). 質的研究法マッピング. 新曜社

Addy, Tracie, et al. (2021) *What Inclusive Instructors Do: Principles and Practices for Excellence in College Teaching*. Stylus Publishing, LLT

Cooke, Chikako(2020) Emotional Personal Japanese over Practical Useful Japanese, *The 28th Central Association of Teachers of Japanese Conference Proceedings*. 121-136

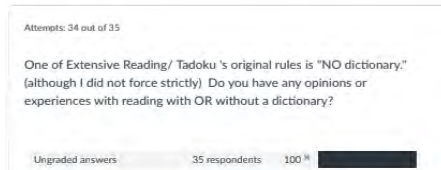
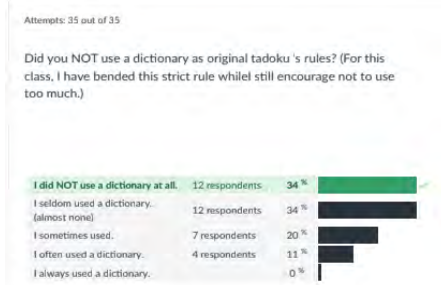
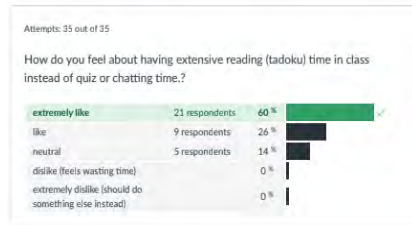
資料

スミス大学多読アンケート (2021年秋学期日本語1年生1学期目)



テキサス大学多読アンケート (2021年秋学期日本語1年生1学期目)

Question Breakdown



Attempts: 35 out of 35

Do you feel more comfortable reading than before some what?



Attempts: 35 out of 35

Do you feel that in class daily Tadoku helped you improve your reading somewhat?

Although my main purpose of this assignment is more for students to find some kind of joy from the language they are studying, exploring some kind of world through reading or simply having relaxed time, I would like to know if you feel some kind of academic benefits from this not so structured assignment.



Attempts: 35 out of 35

Forget about Japanese language skill or improvement, but, do you feel relaxed or calmed during reading quietly?



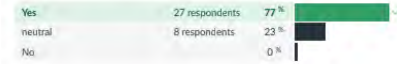
Attempts: 35 out of 35

Do you feel pleasure / fun/ joy (forget about grading/ improving/ practical reasons) just from reading?



Attempts: 35 out of 35

Does having few minutes of reading time (instead of in class quiz) in every class establish some kind of reading habit?



Attempts: 33 out of 35

Please write any comments on extensive reading (tadoku) practice itself (part you like; part you dislike- anything)

How is your experience of Tadoku time every class at the beginning of class?

Please write anything you noticed, recognized, or realized.

(For example, the in-class Tadoku time help me read more books because other students are also reading. I realized that it is boring to start class. Tadoku time makes me sleepy. I noticed that I am more focused after Tadoku time. etc.)

Ungraded answers 35 respondents 100 %

[View in SpeedGrader](#)